

髪切虫

夢野久作

青空文庫

桐きりの青葉が 蝠こうもり 蝠こうもり色に重なり合つて、その中の一枚か二枚かが時折り、あるかないかの夕風にヒラリヒラリと踊っている。

うるんだ宵星の二つ三つが、大きく大きくその上にまばたき初めると、遠く近くの魂がヒツソリと静まり返つて、世界中が何となく生あたたかい悪魔の夕メ息じみて来る。

その桐畠の片隅の一番低い葉蔭に在る、太い枝の岐わかれ目に、昼間から一匹の髪切虫かみきりむしがシツカリと獅嚙しがみ付いていた。その髪切虫が、そうした悪魔気分あくま気分に示唆そそられて、ソロソロとその長い触角を動かし初めた。

髪切虫にとつては、触角を動かす事が、つまり、考える事であつた。見る事であつた。聞く事であつた。嗅ぐ事であつた。あらゆる感覚を一つに集めた全生命そのものであつた。その卵白色とエナメル黒のダンダラの長い長い拋物線型に伸びた触角は、宇宙間に彷徨ほうこうしている超時間的、超空間的の無限の波動を、自由自在の敏感さうっけいで受容うけいれるところの……：……変幻極まりないそうして受入れつつユラリユラリと桐の葉蔭で旋回しているところの……：……変幻極まりない鋭敏な、小さい、生きた、アンテナそのものであつた。

蝙蝠色に重なり合った桐の葉の群れのズツト向うの、青い半円型の草山の蔭の地平線から、ボヘメヤ硝子色ガラスのサーチライトが、空気よりも軽く、淋しい、水か硝子のように当てどもなく、そこはかとなく撒き散らまされていた。だからその草山の方向に、何気なく触角を向けている中に髪切虫は、何ともいえない大宇宙の神秘さをヒシヒシと感じ初めて来たのであった。

その草山の向うの、海の向うの、大陸の向うの、星座の向うの、まだまだずっと向うの、大地が作る半円球越しの何千里か向うの広い広い土地は、まだその日の正午近くらしくかった。その焦げ付く程熱した、沙漠の塵埃ほこりだらけの大空に、何千年か前から漂い残って、ニュートンの引力説に逆行し、アインシュタインの量子論を超越した虚空の行き止まりにぶつかって、極く極くデリケートな超短波の宇宙線に変化しながら、やっと引返して来たイースターの霊動が、螢ほたるの光のように青臭く、淋しく、シンシンと髪切虫の触角に感じて来るのであった。

それはナイル河底の冥府めいふの法廷で、今から一千九百六十五年前に、記録係のトートの神が読上げた、神秘的な、薄嗔うすがれた声が大空の涯から引返して来た旋律に相違なかった。

青桐の幹にシツカリと獅噛み付いた髪切虫の触角が、ピンと一直線に伸び切って、眼に

も止まらぬ位すばらしく細かく……ブルルン……ブルルン……ブルルン……ブルブルブルルルルルルルルルルルルルルルル……と震動し初めた。

エジプトの

御代しろしめす

美しき

クレオパトラの

わが女王は

笑はせたまはず」

国々は

うれひに鎖し

民草は

悲しみ濡れて

朝まつり

いとおろそかに

夜のおとど

みあかし暗く

まさびしき

御圍のうち

わが女王は

寝がへらせつゝ

ひそやかに

歎かせたまふ」

われはこれ

エジプトの

神々の

思ふこと

ねごふこと

何一つ

ただ一つ

わが知れる

ものみなは

たどくと

天地は

ものみなは

めぎめては

ちりひちに

美^くはしの女王

御代を治めて

力をかねて

とゞかぬは無く

かなはぬはなし

不足なけれど

みちたらぬもの

生きとし生ける

などかくばかり

ものうきやらむ」

古くよごれて

汗ばみつかれ

又ゐねむりて

まみれ腐^{くさ}れて

おなじ日と
さびしらに

おなじ月のみ
かゞよひ渡る」

われもまた
はるあき
春秋を

あだいたづらに

老いて行くのみ

ああわれは

かくはかなくも

エジプトの

御代を知りつゝ

神々の

まもりうけつゝ

此の広き

山と河にも

おもしろく

をかしき事を

何一つ

見出でぬまゝに

老い行きて

死に果てむ身か」

御涙

ハラ／＼と落ち

ほのぼのと

夜は明けわたる」

折しまれ
女王様の

カヤ／＼と

わが女王の

いづくより

一匹の

かしこくも

此上もなく

黄金にも

御髪を

啄ばませ

カヤ／＼と

あなめづらしや

御声として

笑はせ給ふ」

御圍ぬちに

迷ひ入りけむ

髪切虫を

捕はせ給ひ

興がらせつゝ

たとへ難かる

あたへ給ひて

喰ませ給ひて

笑はせ給ふ」

あなをかし
おもしろの
いつまでも

髪切虫よ
髪切虫よ
髪切り飽かず」

あかつきの
はてしなき
残りなく
丸坊主に

雲の波打つ
わが黒髪を
切りつくさむとや
しつくさむとや」

埃エジプト及の
はばからね
なれ
汝こそは
青光る
美うるはしの

御代を知る身を
髪切虫よ
虫の王なれ
髪切虫よ
髪切虫よ
髪切虫よ」

われ死なば

髪切の

かぎりなく

はてしなく

黒雲の

白浪の

匍ひまはり

闇といふ

女てふ

こと／＼く

青空の

黒つちの

人間の

口づけの

美しき

汝なれに慣ひて

虫と生まれて

恋を重ねて

卵を生みて

天ぎるきはみ

打ち寄るかぎり

且つ飛びかけり

闇しのに忍びて

女の髪かみを

喰たうべつくして

たなびくところ

くゞまるどころ

さまよふきはみ

結むすばほるかぎり

坊主あたまを

とことは
永久永遠に

あなをかし

おもしろの

ヒヒホホ

はや
流行らせむかな

あなおもしろや

かみきり虫や

カヤくくくく」

きみ
女王の御代

大御心

うたげ
歌宴して

わきした
腋下の

こと／＼く

かの虫に

これより朗ほがらに

ひらけ浮かれて

舞ひ給ふとて

うづまきげ
おん渦巻毛

抜かせ給ひて

あたへ給ひぬ」

さればわが

み誓ひの

みひつぎ
御柩の

きみ
女王の御果て

固きにまかせ

御片隅に

彼の虫の

木乃伊ミイラを作り

秘めやかに

納めまつりつ

女王様わがきみの

髪切虫の

生れあまさむ

来世を待ちね

美うるはしき

坊主頭を

永久永遠とこはに

流行はやらせむ為

されば聞け

後の世の人

女王様わがきみの

木乃伊ミイラ納めし

御み柩ひつぎの

おん片隅に

女王様わがきみの

御み髪ぐし喰はみつゝ

髪切虫

今も啼なくなり

千年の

神秘をこめて

キツチく……キツチく……

……ギイくくくく……」

「キツキツ。ギイギイギイギイギイ」

桐の葉蔭の髪切虫は、思わず啼いてしまった。その拍子にイーサーの靈動がフツツリと感じられなくなってしまったが……………。

……しかし……それでも若い髪切虫は感激にふるえ上ったのであった。

ただ残念なことに、自分が果して二千年前の埃^{エジプト}及女王クレオパトラの生れ変りなのか。それとも女王様の寢棺の中に秘め置かれた髪切虫か、鱷河馬^{アマム}にも喰われず、太陽神^{オシリス}にも叱られずに二千年後の今日^{こんにち}、輪廻^{りんねてんじょう}転生の道理に恵まれて、呼吸^{いき}を吹返して来たものか、その辺のところがサツパリ判明しなかったが、やがて間もなく、そんな事はどうでもいい事に気が付いたので、髪切虫は一層、朗かになった。

「そうだ。妾^{わたし}はこれから恋を探さなければならない。そうして卵を沢山に生んで、可愛い子供をウジャウジャ撒^まき散らして、世界中の女の髪毛^{かみ}をみんな朗かに啖^たべさせて、一人残らずクルクル坊主にしてしまわなければならないのだわ」

けれども彼女は恋というものがドンナものか知らなかった。……一体恋なんていうものはドンナ処に、ドンナ風にして在るものだろう……と思つて、ソロソロと桐の葉の上に匍

い上りながらそこいらを見まわした。

桐島の周囲の木立は、大きくまばたく夕星ゆうざつの下もとに、青々と暮れ悩んでいた。その重なり合った枝と、葉と、幹の向うに白々と国道が横たわっていて、その向うのポプラの樹が行儀よく立並んだ間から、何だかわからない非常に美しいものが光って見えた。

それは何ともいえず匂やかな、柔かい薄桃色の絹シエードの光であった。

「アラツ。まあ何て神秘的な光でしょう。……妾は思い出したわ。虫の血で染めたパピルスあんどんの行燈あんどんを……ナイル河に臨んだ王宮の燈火ともしびを……妾の恋はキットあそこに在るのに違いないわ」

それから彼女はシツカリと畳まっている左右の羽根を生れて初めて、夕暗ゆうやみの中でユルユルと拵こしらへてみた。なやましい湿度を含んだ風が羽根の裏側にヒツソリと沁み渡った、と思うと彼女は早や、青い青い夕星の下の宵暗よいやみを、はるかをはるか桃色の光に向って一直線に飛んで行くのであった。

「アツ。お父様……髪切虫が来ましたよ」

「ナニ。髪切虫が……」

「ええ。お父様が今夜は違った虫が捕りたいから誘蛾燈ようとうに赤いシエードを掛けとけて仰お

「言つたでしよう。ですからそうしといたら蝶々は一匹も来ないでコンナ髪切虫が……」

「ううむ。面白いのう。甲虫は一体に赤い色が好きなのかも知れんものう」

「オヤツ。この髪切虫は普通のと違っている。この間お父様が大学で見せて下さった化石の髪切虫によく似てますよ。ね。ホラネ。身体からだが瓢箪ひょうたん型になって、触角がズツト長くて……おまけにトテモ綺麗ですよ。卵白色たまごと、黒天鵞絨色びろうどのダンダラになって……ホラ……

……ネ……」

「フウム。成る程。これは珍しいのう。三千年ばかり前のツタンカーメンの墓の中から出て来た、実物の木乃伊ミイラとはすこし色が違うが、これがホントの色じやろう。今はモウこの世界から絶滅している種類だと聞いているのに……おかしいなあこんな処に居るのは……」

「その木乃伊ミイラの棺の中から生き返った奴が埃エジプト及から飛んで来たのじやないでしょうか」

「アハハハ。そうかも知れんものう。とにかく標本にしといて御覧……：学界に報告してみるから……」

青酸瓦斯ガスにみちみちた硝子ガラスの毒壺に入れられるべくピンセットで挟み上げられた時、彼女は思わず手足と触角を振りまわして悲鳴をあげた。今を最後の千古の神秘をこめて、

「ギチギチギチギチ。イチイチイチイチ。ギイギイギイ。カヤカヤ……カヤカヤカヤカヤ

カ
ヤ
⋮
⋮
⋮
⋮
└

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：kazushi

2000年10月25日公開

2006年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

髪切虫

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>